

9 参考資料 「ヒッタイトの鉄の謎に挑む」

2010.8.7. 朝日新聞朝刊に掲載された記事

ヒッタイトの故地 アナトリア高原（現トルコ）で発掘調査を進める大村 幸弘氏の話を中心に愛媛大学でのシンポジウムで聴講

「初めて人工鉄器を実用化したのが、アナトリア高原（現トルコ）に君臨したヒッタイトといわれてきましたが、最近の現地発掘調査で鉄器の出現がヒッタイトが台頭する以前の紀元前21世紀に遡る」と

とお聞きし、「ヒッタイトの鉄の謎が日本人研究者たちの発掘で解き明かされる」と胸わくわくで、その後どうなったのか 気になっていましたが、今朝 届けられた朝日新聞の朝刊に現地で「鉄の帝国」の謎に挑む日本の研究者の発掘現場を訪れた記事「ヒッタイトの鉄の謎に挑む」の記事が掲載されていました。

鉄の帝国 ヒッタイトの謎 鉄のロマンを掻き立てる記事 ご参考に掲載



2010. 8. 7. Mutsu Nakanishi

- 参考資料 1. 大村 幸弘 鉄を生みだした帝国—ヒッタイト発掘 (NHK ブックス 391)
- 2. 大村 幸弘 アナトリア発掘記 ~カマン・カレホユック遺跡の二十年 (NHK ブックス)
- 和鉄の道 1. 日本のたたら製鉄の源流を考える <http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/8iron02.pdf>
ヒッタイト・ツタンカーメンの鉄 そして 四川をつなぐ西南シルクロードがたたら源流???
- 2. 「人類が初めて手にした鉄の故地 ヒッタイト」 基調講演 アナトリア研究所長 大村 幸弘氏
愛媛大 東アジア古代鉄文化研究センター 国際シンポジウム「鉄と帝国の歴史」 聴講記録
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/8iron12.pdf>

■ 今年の夏は出雲田儀川沿いに点在する田儀桜井家の製鉄遺跡群と神戸川水系の朝日たたら跡を訪ねたいと計画しましたが、まだ計画倒れで実現できていません。この地域へは足を踏み入れたことがなく、是非一度訪れたいとおもっています。

■「発掘された日本列島 2010」の本を手に入れて最近の製鉄遺跡の発掘状況を見る。

- 福島県の太平洋沿岸相馬地方 古代の行方金沢製鉄遺跡群の南 横大道遺跡で大規模な官営製鉄工房跡が出土したという。この地方が 古代対蝦夷の拠点として、武器製造をにう大製鉄コンビナートの広がり本場に大きいようだ。
- 昨年淡路島で出土した弥生時代後期後半 卑弥呼の時代の大きな鍛冶村 垣内遺跡では その後の調査で 鉄器製造跡と考えられる竪穴建物が 17 棟に達することが明らかになり、数多くの鉄片切や炉跡と考えられる赤茶けた焼土部が出土しているが、不思議なことに鞆羽口は見つからないという。

■ また、新聞報道によると 淡路島 弥生時代後期後半の大きな鍛冶村 垣内遺跡で 出土した大型鉄素材は朝鮮半島製の可能性が高いという。

不明な羽口の代替として 手に入れやすい蓮の茎や竹が羽口として充分機能することが、8月に実施された鍛冶炉復元実験で 明らかになったという。

(2010.8.27. 読売・神戸新聞ほか)

この大規模な鍛冶工房が弥生から古墳時代への変遷に

どんな役割を演じたのか 興味津々であるが、調査はまだ これからのようだ。



今日の朝顔 2010.8.7. 朝

朝 庭に咲く朝顔を眺めるのが楽しみ

ヒッタイト 鉄の謎に挑む

通説揺らぐ発見も

鉄を武器にアナトリア（現在のトルコ）に強勢を誇ったヒッタイト。文明の発展に大きな貢献をした「鉄」を、彼らはいっ手にしたのか。製鉄技術はどのように世界に広がったのか。「鉄の帝国」の謎に挑む日本の研究者の発掘現場を訪れた。

（編集委員・中村俊介）



険しい岩山に築かれたヒュクリュカレ遺跡の城壁



カマン・カレホユック遺跡近くの開館した考古学博物館。遺跡を模した丘のようなデザインだ＝いずれも中村写す

日本の研究機関、トルコで発掘25年

アンカラから南東に65キロ。岩山の上にヒッタイト帝国期（紀元前1400〜同1200年ごろ）のヒュクリュカレ遺跡はある。険しい斜面に石の壁が顔をのぞかせる。高さ7メートル。巨石の上に巨干しれんがを積んで城壁にしたらしい。周囲には数百メートル四方の街があったことが磁気探査でわかっている。

「この遺跡にヒッタイトの製鉄炉があってもおかしくない。付近には鉄鉱石が転がっているし、鹿の骨もある。鹿がいたということは、燃料の木々も豊富だったということだ」。中近東文化センター

（東京）の付属機関、アナトリア考古学研究所の松村公仁研究員はいう。

焼かれて変色したれんががあった。大火災の痕跡らしい。帝国を滅亡に追い込んだ戦いの遺物が出るかもしれない、という期待を抱かせる。

中近東文化センターは1985年、トルコ中部のカマン・カレホユック遺跡で調査を始め、98年には現地のアナトリア考古学研究所を設立。昨年からヒュクリュカレ遺跡で本格的な発掘を始めた。

今年7月にはカマン・カレホユック考古学博物館が開館し、トルコ政府が招いた報道陣に公開された。日本政府の途上国援助（ODA）を含む総事業費は約5億円。ヒッタイトの謎を長期的に探究する体制が整った。

「わがて鉄をめぐる秘密のベールがはがされていくはずだ」。大村幸弘所長は、その力を込める。調査の進展次第で、鉄を駆使して帝国を築き上げたヒッタイトの表像に迫れるからだ。それは、人類が飛躍を遂げる原動力となった製鉄技術の伝播過程の解明につながる。

従来、鉄の使用はヒッタイトから始まると思われてきた。今、その通説は揺らいでいる。より古い鉄の遺物が見つかり始めているのだ。

近年カマン・カレホユック遺跡でも鉄器が見つかった。紀元前21世紀前後、ヒッタイトが栄える前の前期青銅器時代のもの可能性がある。ならば、鉄を初めて使ったのはヒッタイトより前にいた民族

なにか。それともヒッタイトに連なる民族なのか。同研究所は、よりはっきりとした製鉄関連遺構を探る意向だ。

人類が鉄の時代に入ったきっかけも謎に包まれている。紀元前1200年ごろ、鉄を独占してきたヒッタイト帝国が崩壊し、製鉄技術が各地にあふれ出したとされる。だが、背景がわからない。

従来、ヒッタイト滅亡のひきがねは「海の民」の侵攻とされてきた。しかし、根拠は古代エジプトの碑文の記述だけ。「海の民」の正体は不明で、彼らの侵攻を示す考古学的な形跡もない。

ドイツの考古学者アンドレアス・シャハナーさんは「海の民」説は否定されつつある。影響があったとしても一部だっただろう。政治的な反乱か、気候の変化か、あるいはその両方ではないか。疫病の流行も指摘されている。帝国滅亡は複合的な原因だったのかもしれない。

大村所長は「ヒュクリュカレとカマン・カレホユックは互いに補完する遺跡だ。ここから帝国滅亡の原因や鉄の拡散過程が見えてくるかもしれない。滅亡期の製鉄の炉床を見つければ、周辺地域の遺構との比較検討もできる」と話している。

○ 参考資料 1. 大村 幸弘 鉄を生みだした帝国—ヒッタイト発掘 (NHK ブックス 391)
 2. 大村 幸弘 アナトリア発掘記 ~カマン・カレホユック遺跡の二十年 (NHK ブックス)

○ 和鉄の道 1. 日本のたたら製鉄の源流を考える <http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/8iron02.pdf>
 ヒッタイト・ツタンカーメンの鉄 そして 四川をつなぐ西南シルクロードがたたら源流???

2. 「人類が初めて手にした鉄の故地 ヒッタイト」 基調講演 アナトリア研究所長 大村 幸弘氏
 愛媛大 東アジア古代鉄文化研究センター 国際シンポジウム「鉄と帝国の歴史」 聴講記録
<http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/8iron12.pdf>